

働 き つ つ 学 ぶ

労 働 省 婦 人 少 年 局

1952 年 4 月

27年

年少労働者の資質の向上をはかるためには、教育の問題がきわめて重要な地位を占めることは異論のないところであるが、現実の問題として働くことと学ぶことを両立させるためにはいろいろな障害が横たわっている。この障害をできるだけ除去して年少労働者に学ぶ機会を与えるためには職場の先輩や労働組合の活動俟たなければならない部面も多いのであるが、それにもまして重要なのは事業主の理解である。

この資料は富士電炉株式会社発行の「FUJI DENRO」オ五号に登載された同社々長後藤安太郎氏の論文であるが、事業主をはじめ年少労働者の教育に關心を持つ人々に多くの有益な示唆を与えるものと思われるので同氏の承諾を得てフリントしたものである。

(1951. 4. 15. 労働省婦人少年局)

学ぶつつき

富士電炉工業株式会社社長 後藤 安太郎

学ぶつつきという事は、富士電炉経営の一貫した根本方針である。

製品を作り、人を作り、富を作るという三つの目的がバランスした正三角形になる事は、会社経営の目指す所である。そして製品を作り又は富を作ると同じ程度に人を作る事に努力しなければならないと思う。此の三つは別々の問題でなく、互いに関連した一元の事である。

又働く人の立場からいえば、職場で働くことが、人間として成長する道であり、会社繁栄の道であり、併せて社会に貢献する道であつて、此の三つの事は結局一つに帰するという事がよくわかつて来れば、人の働く力は随分高まつて来る。そしてやがて、毎日の働きの中に、生争にかえても惜しくない程の貴さのある事がわかつて来る。そうすれば働く事がいよいよ楽しくなる。

人の力は一途どこから生れて来るか、又どうすればこれを高めることが出来るか、という事が私に課せられた最大の研究問題である。私は十数年来毎日この事のために最も多くの時間を費して来た。工場経営者にとって第一義的の事であると思うからである。

そして人の力というものは結局三つの要素、即ち体力と知力と精神力とであり、此の三つが完全に一つに融合する時、人間は最大の力が出るのである。それはとりもなおさず、完成人格の理想であり、それが同時に最大活動力の人であるを私は信じている。

個人の力が此の三要素の完全な融合であるとすれば、個人の組織何集合体である会社という、一つの人格についても同様な三要素を考える事が出来る。即ち

個人の 知力は 会社の 製品を作る事即ち Engineering
場合の 場合の

(2)

個人の精神力的に 会社の人を作る事 即ち Education
場合の 場合の

体力は 富を作る事 即ち Economy

に合致する。即ち Engineering と Education と Economy の三つが正三角形になる事が理想だと私は思っている。

この内で最もむづかしいのが人を作る事である。こんなことをいうと、人は理想家、空想家、物好きなどというかも知れない。然しこれ以外に工場経営の意義はないと私は永年確信してやって来た。

此の三要素の内の一つ、例えば利潤を沢山あげろという事だけで、工場経営に成功したと、世の人々はよくいうがそれだけでは真の成功ではない。

実行の裏付のない理想は空想であるが、少しずつでも理想は絶えず進行して行くべきものである。私は自分に天分や力がないから、理想を低くもつべきだと考えたくない。理想は思い切つて高くもち、自分の力が弱ければそれだけ長い年月努力して其の実現に努力すべきだと思つてゐる。富士電炉の自力による長期大成の方針とはその事である。とりわけ単人間の教育に関する限り、長年に亘る努力と忍耐が大切である。

工場経営と夜学奨励とは両立するか

富士電炉ではその設立の主旨から、青年達には働きつつ夜学へ通う事を奨励して来たので、若い従業員的大部分は夜学生である。14年前の創立当時にはさうでもなかったが、終戦後は夜学へ行くために富士電炉に入社せよという志望者がめつきり増えて来た。そして私の考えもだんだん変つて来た。

それは富士電炉は夜学生の働く便宜のために都合のよい会社だといふように考えるよりも、富士電炉の職場自体が人を作る所で、そのために夜学へ行く事を奨励しているのだといふ事である。此の二つの事はほんの僅かの違いのようであるが、決してさうではなく、その内容には大きな隔きがある。

更に我々は高等学校の3年乃至4年、大学の4年、或は4年以上というように年限をおかず、一生を通じて人を作る教育道場としての一面の使命を感じなければならぬという事、もつと理想をいえば現在の我が国の学校教育の欠陥を補つて、眞の人間を作る取場をらしめよという事である。

私が工場経営者として、こんな事を考える事は、少し世間の常識からいって奇異に思われるかも知れないけれども、こう考えなければ苦勞をして工場を經營する意味がないと思つてゐる。だから私は此の根本方針に沿つて經營してゐるつもりである。

この事は純粹の工場経営者としての正しい考え方ではないと思われぬかも知れないが、私にして見れば「大局から見て」会社の經營上利害相反する事でなく、却つて之が将来会社が栄える道だと心から思つてゐる。それは研究と同じように一つの種蒔きであり、投資である。

長 期 大 成

当社では夜学へ通う青年達は残業が出来ないばかりでなく、夕方は毎日他の人達よりも30分かつノ時間ぐらい早退して夜学へ行く。それで別に給料も差引かないし、卒業後の義務も課してはいない。勉強盛りの向学心に富む青年達にはさういう便宜を与える事は必要であり、經營の大局から見て、必ずしもマイナスだとは考えない。勿論自前の生産本位に考えれば工場で猫の手もほしめのような忙しい時に夜学生が仕事をやめて早く帰るという事は随分差支える事もあるのは事實である。そして学生達が夜学へ行く時だけ、外の人達が努力しなければならぬのである。けれども今は富士電炉に於ける取場の先輩の多くは自分達もさうして勉強して来ようぜという事をよく承知してくれてゐる。

折角夜学へ行くために便宜を図つてやうでも卒業するとやめて外の会社へ行つてしまふのでないか、と私に質問される人が多い。然し会社創立以来私はこういう事を心配した事もないし、事實さうい

(4)

う人は殆んどなかつた。此のような事は心配したり、教理や規則で足止めするよりは、居心地のよい職場を作つて、自然に会社に居止まるように努めすべきだと思ふ。

謙遜して言うが我々が従業員に通学を奨励し、その便宜を与えてゐるのは所謂温情や利好きからではなく、大局的に見て、会社が大成するをねであり、更に詳しくいへば、前に述べたように、会社の経営は勿く人々が、働きを通して人間として人生を完うし、会社が繁栄し、社会に貢献するという三つの事が完全に一元的であるという自覚に立つて初めて働きの意味を見出し、それに合致する事だと思ふ所以である。

生涯の教室

工場における職場教育は——直接の仕事を通して、又はレクリエーションのような間接の活動即ち職場生活を通して自然にやる教育と学校教育との二つがあり、又学校教育には、一般社会の学校を利用すること、会社附属の学校をもつことがある。富士電炉では現在自分で学校を作る力はないから一徹つ学校を利用している。然し将来は会社の自力で学校をもちたいものだと思つてゐる。戦時中の青年学校のように会社附属の学校は会社の営利の目的のために設けられるという考え方には私は賛成出来ない。然しその附属学校は卒業後その工場で働く人を養生するのが目的であるとしても、それが必ずしもその工場だけで役立つて、一般社会には通用しない教育をする所だとされてかかるのも賛成出来ない。我々に将来専属の学校を建てる時期が来たとしたら、私は矢張り自分の工場をよく働ける人間を作ること第一義とする。勿論自分達の工場で働く人々は、人間としての高い教養に加ふるに専門技術を習得すべきだと思ふ。人間としての高い教養をもつという事は、一般社会、更に世界中どこへ行つても働ける人間となるために必要な事である。

富士電炉では早稲田大学や早稲田工高へ通う学生が多いが、早稲田のような学校でも、現在の我が国の学校教育に共通な幾多の欠陥

がある。私の希う所はそれを職場で補うことが出来ないかという事
で、それが職場教育の大きな課題なのである。

その点に於いて最も学びたいのがデンマークの国民高等学校の生
活教育である。

職場教育の第一義は人間教育であつて、前に述べたように体力、
知力、精神力の健全な発達である。それは此の三つが完全に融合さ
れた *Dynamic* な力をもつような人間を作ることである。玉川学園
の小原先生は肥満をかつぎ作るピアノも弾ける人間の教育といわれ
るが、我々が工場ではしいのはそういう種類の人である。人の心を
打つような奥深さをもつて製品は、そういう人間の人格からのみ生
れて来るのである。

物と知識の世界は二とりの平面の世界である。それに精神の二
軸が加わつて初めて立体の世界になる。立体の世界は物と知識と精
神とが別々に孤立したものでなくて、三つが相乗積即ち一つに融
合した世界である。我々は工場ではたらく人々にそのような人格を
企願とする。

工場で働く我々は神から与えられた感情の賜ものを忘れ勝ちであ
る。それは科学という物質と理知の世界に生きる現代の人間の欠陥
である。我々は崇高な宇宙の啓示、霊の世界、宗教感情を生活の中
に味える人間になりたい、新約聖書はどんな人間でも新たに生れ変
つて人間から神に働きかけるばかりでなく、神から人間に働きか
ける霊の世界を教えている。

我々の職場教育というものはその内容の低さ、貧しさに於て勿論
学校に比すべくもないのはいうまでもないが、その年限は在職中或は
「生涯」という長い年月である。

私は学校が欲しいけれども、奇財を集めて設立したくはない。基
本的には働きつつ学ぶ、或は我々自身の生産から生み出す力によつ
て我々自身を教育したいと希つてゐる。夜学生の多くが自ら働きつ
つ学ぶのと同様に会社自体が働く場所であると共に自力によつて学
ぶ事の出来る力をもたらすものである。「学校」をもつていなく

(6)

も「教育」は出来る筈である。

勉強は仕事から

職場が学びの場であるためには、指導の任に当る人にはその方針が徹底し、情熱を以て経営者に協力しなければならない。仕事の指導方法それ自体はいうまでもなく、各種の講座や見学会のような同接的な社内学習やレクリエーション、例えば朝礼とか、食堂とか会議とか、午餐会とか、協同組合、朝礼、歌や体操其の他いろいろなグループスポーツなどの凡てが、不自然でなく人格的な要素をもつたものでなければならぬ。例えば食堂経営の意義は、単なる給食のみでなく、会食という社会性のある営みで、その楽しみを通して自然の内に相互に人格陶冶の行われるようなものでなければならぬ。

会議も同様で、多くの会社でやむ生産協議会や、部長長会議の外に当社は職場研究会がある。又時々午餐会や集まりがある。これらの営みは我々が民主主義社会を作る新しい時代へ社会人としての教養を身につけるために役立つようなものであつて好むべき意義がある。

給与制度も職場教育と深い関係がある。当初効果に対する報酬、即ち所謂科学的な能率給制度と、月給制のような人格的給与制度とは、職場教育の観点から大きな開きがある。職場教育を一貫して社風とするには月給制度のような信頼に基づく制度の下でなければ行い難い。

仕事を通して人格は成長してゆくという信念は職場教育の大切な基本である。我々は社会人として仕事を通して社会に貢献すること以上の貢献は出来ない。それ故に職場に於ける勉強は仕事を中心にしてなされるのが順序である。

一人の旋盤工に例をとれば、彼にとつては旋盤仕事を通して社会に貢献することがその願望である。従つてよい旋盤工となるためにはその専門の技能を勉強し、更に作業に関係のある機械学や、金属学、

それからそれらの基礎となるべき力学や数学、又動作研究や疲労に
 関係の深い生理学や医学や栄養学、工場という人間の中で働くため
 には心理学や社会学、経済学、政治、宗教等人間としての基本的な
 勉強……というように考えて来れば、旋盤工としての彼の仕事はそ
 れからそれへと人生のあらゆる問題に関連していることがわかり、
 社会に於ける凡ての問題が彼にとって関係のあることが理解される。
 彼にとってはその仕事、即ち旋盤の勉強から出発して人間としての
 広い勉強が大切である。

これは凡ての職業に対していえる事である。まして工業は科学を
 最も深く取り入れた職業であり、最も学問的であろうと共に、最も社会
 性に富む仕事である。どうしよう個人的な能率を、又工場全体とし
 ての能率を上げて、労力、動力、時間、資材などを無駄のないよう
 にする事が出来るか、という広範な事柄に関心をもち人でなければ
 ならない。その製品や事業は社会と深い関係をもっていることもわ
 かる。

毎日工場に起るいろいろな出来事も、求める心のある人にとって
 は貴い人生体験として人格を高めてゆくが、向上心の乏しい人には
 唯の出来事として過ぎ去ってゆく。経営者であれ、監督者、技術者、
 又工員であれ、成程のない繰り返しの人生は最も恥ずべきものである。
 働きつつ学ぶ事は工場経営にとって最大の課題であり、人を作る事
 はその事業をして永く不滅の価値をもたせるための第一条件である。

GAa1/1

8B-1-9



女性と仕事の未来館



00965238